

## 「中世末期ヴェネツィアにおける福祉：大兄弟会による救済と相互扶助から」

一橋大学大学院経済学研究科 博士学位論文 要旨

執筆者：高見純 (ED093001)

### (1) 問題の所在

本論文は、中世末期イタリア都市ヴェネツィアを事例として、15世紀ヴェネツィア都市社会における福祉形成の一端を考察する。

近代以前のキリスト教社会において、福祉を行う動機は、主に慈善が提供した。キリスト教的慈善の起源と発生は、キリスト教東ローマ帝国に求められようが、中世後期カトリック都市社会でもその伝統は大いに受け継がれ、活用された。都市社会において、困窮化した人々を救済する福祉の存在は不可欠であり、それを実践する際の枠組みが依存する論理を慈善が担った。富の垂直的な流れを実効的なものにする私的な遺産寄付は、慈善が動因となった。そして、それによって実施される救済行為は、慈善的な枠組みに規定されて行われた。

本論文では、こうした慈善的な枠組みによって成立していた中世後期の都市社会における福祉について検討する。特に、当時の都市社会において「よこ」の関係性を形成する枠組みとして機能した相互扶助団体である兄弟会に着目して検討する。

中世社会の慈善は、同時代のコトルツリが記述しているように、家族、親類といったイエ経済の範疇を優先して行われることが一般的であった。しかし、この範疇の再編成が生じざるを得ない場所・社会状況が出現する。その場所の1つが都市空間であり、地縁・血縁が比較的希薄な都市において「家族」を擬制的に拡大形成したのが兄弟会であった。拡大大家族たる兄弟会では、自身の霊的救済を願う会員兄弟が、会員間の相互扶助として共同で霊的救済活動を行うとともに、物質的救済も行ったのである。

特に14世紀後半以降、イエ経済ではリスクを管理しきれない社会状況も現出した。伝染病の定期的な流行によって、貧困・病死のリスクが高まった時代、兄弟会はその数において最盛期を迎える。特に都市の人口規模が大きく、地中海とアルプス以北の結節点として経済的にも繁栄したイタリア半島で隆盛した。本論文が事例として取り上げるヴェネツィアは、イタリアの中でもその人口数、経済力において傑出した都市の1つであった。そこで繰り上げられる相互扶助活動も際立ったものを示し、「よこ」の関係性を起点としながらも、それが「たて」的な性格を有する関係へと拡大していく様相が観察される。

1970年代以降に本格化し蓄積された諸研究によって、中世後期イタリアでは、諸都市において俗人信徒を中心に構成された兄弟会が多様な展開を見せたことが明らかになっている。会員は霊的救済を求めて様々な活動が行ったが、特に14世紀前半までは、慈善を具体

的な活動目的として組織化された慈善兄弟会が主導した大規模な貧民救済活動や、兄弟会が大規模施療院の運営主体になるなど、都市の福祉の領域における兄弟会の存在感が明らかになり、一定の評価を得ていると言えよう。しかし、一方で、14世紀後半以降は、兄弟会が直接的で広範な救済活動から手を引くとともに、救済の範囲を縮小・限定させることによって福祉全体における存在感を希薄化させ、代わって新たに大施療院 Ospedale Maggiore などが台頭する時代と捉えられている。

このように、近年の諸研究の成果は、15世紀の兄弟会を救済史からの後退として謂わば消極的な位置付けを与えていると言える。一方で、16世紀ヴェネツィアの兄弟会を中心に研究し、イタリア兄弟会史の出発点の1つであるプランは、ヴェネツィアを例に取りながら、範囲を限定化させた兄弟会の救済がより効率的な救済を可能にした効用を指摘し、積極的な意義を見出した。実際、ヴェネツィアでは、16世紀の中盤まで大施療院設立が実現せず、住民の福祉にとって、都市の数ある中小規模施療院とともに、兄弟会の提供する救済が重要な役割を担った。特に、鞭打ち苦行兄弟会という同種の兄弟会の幾つかが政府によって公認され、大兄弟会として特権的な地位を得ることで富裕化し、豊富な資金力で17世紀以降まで都市の福祉に一定の役割を果たし続けたことは、この都市の福祉の展開にとって特徴的な点であったと言えよう。

一方、これまでのヴェネツィア大兄弟会研究では、福祉面の活動については、主に16世紀以降を中心に検討が進んできた。15世紀までの実態的な救済活動を解明しようという研究はこれまで存在しない。しかし、14世紀のペスト襲来以降、伝染病と社会不安の時代を迎えた15世紀において、兄弟会活動と兄弟会の提供する救済は、同時代に生きた都市住民にとって大きな意味を有したと考えられ、ヴェネツィアにおいても、17世紀以降まで存続した兄弟会の本質的基礎は、この時代に形成されたと考えられる。

## (2) 本論文の課題と分析方法

本論文の課題は、14世紀後半以降の社会変化を前提として、15世紀前半を検討対象の中心に据え、ヴェネツィアにおける大兄弟会の救済活動がどのように展開し、兄弟会と兄弟会活動そのものの発展をどのように規定しえたのかについて解明することである。それによって、15世紀のイタリア都市社会において果たした兄弟会の福祉的役割を改めて検討し、評価する。

また、ヴェネツィアは15世紀まで、西欧地域と地中海地域の結節点として、西欧有数の大規模港湾都市であった。ヒトとモノが絶えず流入する大規模で開かれた都市社会という環境下で、如何にして福祉が体系化されたのか。会員による閉鎖性を基本的な性格とする兄弟会の検討は、この疑問への回答の1つを与えうると考えられる。

中世イタリアの都市生活にとって重要な枠組みであった兄弟会研究については、多様な蓄積がある。一方で、そもそも収支活動に焦点を当てて経済的な視点から会の運営を論じた研究は多くなく、本研究はそこに一例を加える試みである。また、これまでの研究は、主要な支出項目や、収入額の大きさに注目し、各兄弟会の多様な活動内容を収支面から明らかにしているものの、兄弟会の財政を本格的に論じたものではなかった。本論文では、各収入項目と支出項目との関係性にまで踏み込んで兄弟会の収支全体を分析する。その中で、兄弟会の財政構造を顕在化させ、兄弟会活動の実態と経済的裏付け、運営組織との関係性を少しでも鮮明に浮かび上がらせることを目標とした。

また、ヴェネツィア史研究にとっても、都市内で大きな役割を果たした大兄弟会の財政、及び経済的支出についての解明が、著しく欠如していることが度々指摘されてきた。大兄弟会の紋章は、今も尚、ヴェネツィアの街角にいくつも残っている。中世から現代まで、この都市に生きる人々にとっては、都市を構成する中心的な団体の1つとして当然のように接せられてきた。しかし、そのような存在に至る財政的な基盤の詳しい成立は、未検証のままであった。従って、本論文は、研究史上、長らく不明点として放置されてきた問題の解決を試みるものでもある。そして、これまで規範資料から想像されてきた活動が、実際に都市共同体の住民の福祉のために、どの程度役割を果たしていたかについて明らかにすることとなった。

分析、及び検討は、同時代の文書史料を参照することによって進められる。シマンカス、バチカンなどと並び、ヴェネツィア共和国の文書は、その保存量において、近代以前では際立って多いことが知られている。イタリア国立ヴェネツィア文書館 Archivio di Stato di Venezia には、旧ヴェネツィア共和国の史料の大半が保存されている。1797年に滅亡する前の共和国時代の公文書が所蔵資料の中心を占めるが、イタリア共和国の資料や私的文書も保存されている。その総数40万点のアーカイブが収められた書架は、総延長78kmに及ぶという。

この中に、私的な団体であったにもかかわらず、大兄弟会の史料群も豊富に残されている。15世紀末までに成立した大兄弟会は、聖マルコ兄弟会 Scuola Grande di San Marco、聖ミゼリコルディア兄弟会 Scuola Grande di Santa Maria della Misericordia、聖母マリア兄弟会 Scuola Grande della Santa Maria della Carita'、福音の聖ヨハネ兄弟会 Scuola Grande di San Giovanni Evangelista、聖ロクス兄弟会 Scuola Grande di San Rocco の5つがあるが、文書館には、各大兄弟会の史料が、それぞれ会名が冠せられた独立した資料群として纏められている。会が未だに存続し、私的文書室に一部が所蔵されている聖ロクス兄弟会の史料と、福音の聖ヨハネ兄弟会の近代以降の史料を除き、現存する殆どの大兄弟会関連史料がこ

ここに保存されている。

史料群は、数が最も多い聖ロクス兄弟会を筆頭に、どれも数百冊から成る。史料によっては、紙片の束を紙製のファイルで綴じただけのものも存在する。保存状態は、史料によって様々である。所蔵されている史料の年代は、大半の大兄弟会が設立された13世紀から、共和国崩壊後の19世紀前半までを含む。ただし、13世紀から14世紀の史料は数が極めて少なく、また全時代を通してオリジナルの記録の写しとして作成された史料が多いが、16世紀以降、とりわけ18世紀以降になると、残存史料の数と種類は大きく増大する。規約、会員名簿、役職者名簿、各種の議事録、各種の会計帳簿、遺産関係の文書、賃貸関係の文書、裁判・契約関係の文書、嫁資授受に関する文書などの他に、都市政府から出された条令を中心に、各時代に項目ごとに整理されて記録された文書も存在する。

本論文では、大兄弟会の中でも、聖マルコ兄弟会の史料群を中心に取り上げる。同会は、13世紀に成立した最古の大兄弟会の1つであり、15世紀後半の本拠地火災によって危機を迎えるまで、都市と同様の守護聖人である聖マルコを抱いたこともあり、都市政府の厚遇も受けて栄えた。15世紀に作成された規約、名簿、項目ごとの史料に加え、特に会計帳簿を中心に据えて詳細に検討する。大兄弟会の実態的活動を解明するには、活動を支える収支面を具体的に記録した資料の分析が有用と考えるからである。また、聖マルコ兄弟会が作成した史料群に加え、比較を目的として聖ミゼリコルディア兄弟会によって作成された一部の会計史料、兄弟会を実質的に監視・管理したヴェネツィア都市政府側によって作成された文書史料群も適宜参照される。

### (3) 本論の分析視角

本論文の各章の構成は、以下の通りである。第1章「兄弟会と救済」では、西欧都市における物質的救済についての研究史を整理し、その上で、本論文が主として扱う兄弟会を紹介し、物質的救済において、どのような役割を果たしたのか検討する。

まず、救貧研究史上、画期とされてきた2つの時期に注目する。まずは、16世紀前半期である。西欧諸都市において、この時期に発布された一連の救貧改革条令は、長らく近代的救貧法の始源と考えられてきた。前近代的なカトリック的無差別の救貧に対する近代的なプロテスタントによる差別的救貧という、古典的な対立構図を巡る議論を出発点にする。そして、これらの改革条令が、都市外部からの増大する移入者に対して旧来の福祉的枠組みで対応し切れなくなったことによる、新たな局面の表出であったとの位置付けを明確にする。同時に、ヴェネツィア等のカトリック都市における福祉の基本的要素が、16世紀以前からの継続的な側面をも持っていたことを確認する。

時代を遡ること2点目の画期として、14世紀中盤のペスト大流行期を取り上げる。都市

人口を激減させた伝染病は、その後も 15 世紀を通じて数年おきに流行した。社会不安と人口減少が都市社会に与えた影響は大きかったと考えられる。都市社会内部における福祉の在り様の変化について、近年の諸研究による成果から紹介しながら議論し、15 世紀の都市における福祉の特徴を描出する。

これを踏まえて、次節では、先行研究に寄りながら、イタリア諸都市で見られた兄弟会の定義・種類・活動を概観する。その上で、活動の一形態としての物質的救済、及び都市の福祉に占めた役割について、収支と資産運営から解明を目指す本論文の位置付けを確認する。

第 2 章「15 世紀ヴェネツィア社会と大兄弟会」では、まず前章の兄弟会一般の概説を踏まえて、ヴェネツィア社会内部、及び都市福祉における兄弟会の位置付けを確認する。ヴェネツィアにも、職業、活動目的、地縁等を媒介に数百の兄弟会が存在した。その中で、幾つかの鞭打ち苦行兄弟会が大きく成長し、大兄弟会と呼ばれるようになる。一方、他の兄弟会は、小兄弟会と呼ばれ、大兄弟会とは区別された。

次に、本論文が主として扱う 15 世紀を中心に、ヴェネツィア社会とその諸特徴を考察する。まず、ヴェネツィア政府の財政構造を概観し、強制公債の発行が都市財政にとって非常に重要であったことを確認する。そして、財政的逼迫と切り離せない問題としての軍事を取り上げる。軍事的支出は、緊急的な公債発行の最も大きな要因となったと考えられる。また、大兄弟会も、公債購入のみならず、軍隊の編成に際しても貢献を求められた。従って、ここでは、次章で本格的に論じるヴェネツィア政府と大兄弟会の関係性の前段階として、15 世紀ヴェネツィアの軍事的な領域拡大を、先行研究に寄りながら確認する。

次に、大兄弟会の運営に深く関与したと考えられる「市民」について考察する。16 世紀後半には、ヴェネツィア共和国では「市民 *cittadino*」の固定的な身分化が決定された。一方、15 世紀の段階では、同様の「市民」という語は度々使用されたものの、その対象者は流動的であった。本節では、14 世紀から 15 世紀にかけての「市民」という語義の変化と流動性を、先行研究に従って跡付けることによって、15 世紀ヴェネツィアにおける「市民」が指した範囲を検討する。

第 3 章「都市政府と大兄弟会の関係性」では、都市政府と大兄弟会の関係性、及び、政府と政府を構成する貴族層が期待した大兄弟会の役割を検討する。政府内で大兄弟会を直接管理したのは 1310 年以降、都市の治安維持のために設立された十人委員会であり、時代の変遷とともに権力を拡大した。まず、都市政府を構成する諸組織・機関について、先行研究に寄りながら全体的な見取り図を示し、その中での十人委員会の役割、及び役割・権力の大きさを確認する。

次に、十人委員会の議事録資料を中心に分析し、これに兄弟会側の資料を組み合わせながら、委員会と大兄弟会の関係性について考察を進める。大兄弟会は組織規模が大きくなりや

すく、夜間の鞭打ち苦行も希望したことから、都市政府にとって潜在的に都市の治安を乱す可能性のある団体であり、監視の対象となった。大組織の運営者は、組織内で大きな名誉と権力を獲得する可能性も持ったことから、委員会は詳細に渡って、兄弟会を管理しようとしたのである。

一方で、大兄弟会の有した資産、及び会が提供した精神的・物質的救済は、政府を構成した貴族層を含む都市住民にとって、非常に魅力的であったと考えられ、政府はこれを積極的に利用しようとした。特に、救済サービスや金銭的な負担を強いるのみならず、戦争時の軍隊編成において、その役割の一端を担わされたことについて考察が進められる。

第4章「帳簿の作成：アーカイブズにみる拡大と展開」では、大兄弟会による15世紀前半期の収支管理の様相と、運営組織の拡大・発展可能性が、アーカイブズの形成・拡大を通して語られる。16世紀前半期に、ルカ・パチョーリが世界初の本格的な複式簿記指南書を発行したヴェネツィアは、パチョーリ自身がモデルの1つとしたヴェネツィア式簿記の生成地であった。特に、ヴェネツィア式複式簿記は14世紀中に生成され、15世紀は簿記知識の普及・発展期であったと考えられる。

そこでまず、会計史分野の研究史を概観しながら、この時代のヴェネツィア社会における会計知識について確認する。その上で、特に大兄弟会の1つであった聖マルコ兄弟会の遺した会計帳簿を、これまでの研究史上扱われてきた商業簿記との比較の中で検討する。これによって、同兄弟会で収支記録を担当した会員が、ある程度の複式簿記知識を有した商人層等であった可能性が示される。併せて、兄弟会活動という、商業以外を目的とした活動における簿記知識の活用、及び都市社会全体における知識普及の度合いの一端を明らかにする材料が提供される。

次に、複式簿記に加えて、大兄弟会内部における会計・監査システムの拡大、及び記録資料の拡大が検討される。それによって、大兄弟会が、如何にして、種々の管理の必要性が増大する中で、これに対応していったのかが明らかになる。

第5章「兄弟会の収入：15世紀聖マルコ兄弟会の運営と組織」では、15世紀における大兄弟会の拡大の要因が、兄弟会の収入面の分析を通じて検討される。まず、前提として、大兄弟会の組織と社会階層の見取り図が示される。既に15世紀には、貧富に従った会員区分、及び一部の会員による名誉ある役職の独占によって、会内部は、現実の社会階層をある程度反映した性格を有していた。本節では、これを聖マルコ兄弟会の役職者名簿と会員目録の分析を通じて検討する。

次に、1430年代の聖マルコ兄弟会の会計簿から、兄弟会の収入と、その内訳を明らかにする。その上で、支出を伴う種々の兄弟会活動にとって、如何なる収入が重要であったのかが明らかにしていく。特に、物質的救済の実現は、大兄弟会へ寄付された遺産財源が元手にな

ったと考えられる公債利子からの収入が大きく関わっていた。公債利子収入は、物質的救済を含む兄弟会運営全体の安定化にとって非常に重要であった。従って、大兄弟会の救済活動の拡大と発展のためには、遺産獲得が不可欠であった。

最後に、これを受けて、大兄弟会の遺産獲得の傾向を検討する。聖マルコ兄弟会の遺言書資料の文言の分析を通じて、兄弟会に遺産を委託した委託者側からの、兄弟会への期待内容を検討する。14世紀中盤から15世紀後半までの遺言書を検討することで、「永続的」な団体としての大兄弟会へ、単純な寄付ばかりではなく遺産管理を含めて信託した思いが明らかにされる。

第6章「「貧者」への支出：15世紀聖マルコ兄弟会の貧困救済」では、前章の収入の分析に対して、支出が分析される。同様の聖マルコ兄弟会の会計簿、及び役職者の個人的会計簿、兄弟会規約を用いて、15世紀前半期における兄弟会の物質的救済活動が検討される。まず、会計簿から具体的な支出の内訳が示され、兄弟会活動の全体的実態の描出が試みられる。その上で、活動全体に占める物質的救済活動の大きさが評価される。そして、具体的な貧困救済活動について、会計簿から幾つかの勘定項目を取り上げて分析する。救済活動は、兄弟会内部の会員向けに限定されていたが、比較的安定的に実施されていた。兄弟会の具体的な救済活動の様相と性格が浮き彫りになる。

最後に、これを踏まえて、被救済者にとっての大兄弟会による救済の位置付けが考察される。それによって、ヴェネツィア社会内部の福祉において、ヴェネツィア住民に大兄弟会が期待された役割が検討される。

第7章「15世紀後半からの大兄弟会と聖マルコ兄弟会の斜陽」では、15世紀後半以降を中心に、これまで中心的に取り上げてきた聖マルコ兄弟会の事例を、他の大兄弟会との比較を交えながら検討される。

まず、財政規模と管理した慈善施設数における比較から、16世紀以降、聖マルコ兄弟会が財政的に衰退傾向にあった可能性が指摘される。その上で、聖ミゼリコルディア兄弟会によって作成された15世紀の会計帳簿の分析を通じて、聖マルコ兄弟会の事例が、聖ミゼリコルディア兄弟会の事例と比較される。特に、資産形成における特徴の相違を確認し、その帰結としての財政規模の相違が検討される。そして、相違の要因として、聖マルコ兄弟会が、15世紀後半の本拠地火災、及び公債利子に頼った経営という問題によって財政状況を悪化させていった点が指摘される。